

素足で踊る舞踊のための 身体運動の技術としての歩行

堀 切 叙 子

素足で踊る舞踊は、何の制約もなくからだ本来の、関節のそれぞれの部位の特色により、自由な動きを生み出すことが可能である。その考えを素に、からだの自然から生まれる動きの原初を追求する。そして、3種の「姿勢（立位・座位・臥位）」の中で、立位、特に「起立位」を基本に動きはどのように生まれるかを探した。

第一に、その場での足の「外輪・内輪」の置き方から脚の動きがどのように派生してくるか、さらにそこから脚の動きの4種による「方向転換」の生まれる素について述べた(91)。これは同時に、素足で踊る舞踊のための身体運動の技術としての「回転」が生まれる原初である。

第二に、肩と腕の動きが3種の「面」でどのように現われるかを述べた(92)。面は「方向」によって決定され、「前後・左右・上下」の対の明確な3方向をそれぞれ切る面が、冠状縫合面・矢状縫合面・水平面の3種である。そして、それらにより、8つの空間領域が区分され、動きを生み出すときの広がりや理解することがより可能になる。

第三に、足を「外輪に置く・内輪に置く」の連続から、その場での上肢と下肢の動きの関係について追求した(93)。片方の足と脚が、それらの同側に弧を描くように連続して斜め前後方向に動くとき、それに伴って生まれる体幹の動きにより、腕と脚は矢状縫合面を基準にして、反対側の動きが同方向に現われる。また、一方の足に掛けて弧を描くように連続して斜め前後方向に動くとき、それに伴って生まれる体幹の動きにより、腕と脚は同じく矢状縫合面を基準にして、同側の動きが同方向に現われる。

第四に、足と脚の弧を描く動きを発展させると、水平面（床面）での4方向（前後・左右）とそれによって区分される4領域に、どのように腕と脚の動きが現われるかを述べた(94)。そして、さらにそれらの中で、特に、腕と脚が同方向に動くことの重要性を述べた(95)。

本報告では、以上から発展して現われる「歩行」を、腕と脚の動きの関連を主に、3つの視点から考察した。これは、素足で踊る舞踊のための身体運動の技術を、尚一層豊かにしようとする一試案である。その3つの視点とは、1. 後ろ向きに歩くことの重要性、2. 同側の腕と脚が同時に同方向に動く歩き方を通常の歩き方と等価に置く

こと、3. 踏み出した足（脚）のもう片方が進行方向に同時に出される歩き方への着目である。

日常生活でのいろいろな動きの中で「歩行」は重要な役割を持ち、それは前向きに歩くことであり、効率良く歩くためには、腕と脚の関係は常に反対側が交互に動くことによるバランスをとる。この動きは、片方の足と脚がそれらの同側に弧を描くようにして斜め前方向に動くときに生まれる。そして、斜め後ろ方向への動きが、後ろ向きで歩くことを生み出す。この動きは日常生活ではほとんど見られず、通常あまり重要視されていない。しかし、「歩行」が舞踊の範囲に拡大されるとき、後ろ向きに歩くことの重要性をしっかりと把握し鍛練することは、動きの生み出しを重奏させ、動きの発展をより深く理解させる。前向きに歩くときは、「見る」ことの手助けが大きな役割を果たすが、後ろ向きに歩くときは、進行方向を「見る」ことは不可能であり、日常動作にはない特異なものと言える。

次に、同側の腕と脚が同時に同方向に動く歩き方は、一方の足に掛けて弧を描くように斜め前後方向に動くときに生まれ、これは日常動作としては効率はよくなく、何よりも長年、歩き方の失敗のように考えられているので顧みられることが少ないが、後ろ向きに歩くことと同様に動きを生み出すことにおいて重要である。反対側および同側の腕と脚の動きの、それぞれ前向きに歩く・後ろ向きに歩くを等価において動きを考えてゆくことは、舞踊のための動けるからだを造るためのひとつの課題である。

さらに、日常生活での「歩行」にはない、踏み出した足（脚）のもう一方が同時に進行方向に出される歩き方もまた、「歩行」の変化・増幅として、舞踊のための動きを豊かにするために重要であることを強調して、これら一連の「歩行」を出発点とする動きについての叙述を終了する。